

## 災害時に避難支援が必要な人を救える地域づくり

### 高齢者・障がい者などの避難支援強化へ

東日本大震災の教訓を踏まえ、平成25年6月に災害対策基本法が改正され、災害時の高齢者や障がい者などの避難支援が強化されました。

#### 災害対策基本法改正の概要

##### 平常時

- ・避難行動要支援者（避難に支援が必要な高齢者・障がい者など）の名簿の作成を市町村に義務化
- ・避難行動要支援者本人からの同意を得て、民生委員、自主防災組織などの避難支援等関係者に情報提供すること

##### 災害発生時

- ・本人の同意の有無に関わらず、名簿情報を避難支援等関係者その他の者に提供できること

##### 個人情報の守秘義務

- ・名簿情報の提供を受けた者に守秘義務を課すとともに、市町村においては、名簿情報の漏えい防止のために必要な措置を講ずること

### 避難支援強化に向けた取り組み

市では平成26年度の自主防災活動の重点事項の一つとして、自力で避難が困難な高齢者や障がい者などの避難支援強化について自治会や民生委員と協働で取り組んでいます。

#### 避難支援の名簿と個別計画作成の流れ

3月中旬 市による避難行動要支援者の把握

3月中旬～5月末 民生委員による避難行動要支援者宅の戸別訪問調査

9月初旬 市から各地域への名簿と避難支援の個別計画様式の提供

9月初旬以降 各地域での避難支援の個別計画作成



▲自治会連合会、民生委員・児童委員協議会との合同役員会

#### 避難支援が必要な人（避難行動要支援者）

- ▶要介護認定3～5
- ▶身体障害者手帳1～2級
- ▶精神障害保健福祉手帳1～2級
- ▶療育手帳A判定
- ▶難病患者
- ▶一人暮らしまたは高齢者のみの世帯（避難支援が必要な人）など

#### 避難支援のポイント

- ①助ける人自身も自分の命は自分で守るとともに、無理のない活動を第一とすること
- ②自主防災組織と民生委員が連携し、平常時から支援方法について共有し、地域ぐるみの活動とすること
- ③名簿に記載された個人情報には、守秘義務が生じることを理解し取り扱いには留意すること
- ④災害時の避難支援を行う人の行動に対して、批判や責任の追及をしないこと



#### わたしたちの自主防災組織

緑町自治会長 原 徹夫さん



緑町では平成24年度に独自の要援護者（避難に支援が必要な高齢者など）の基準を作成し、募集や面接により要援護者を把握しました。また、支援者を回覧板などで募集したところ15人（うち6人は学生）が手をあげてくれ、支援者が要援護者を訪問してきずなづくりを行いました。

昨年、高齢化などにより弱体化してきた組単位の自主防災組織を解体し、町内を7つのブロックに分けて若い人を責任者に配置しました。同年実施した西地区防災訓練では、この7ブロックにより小学生を要援護者に見立て、担架や車いすを用いた避難訓練を行いました。同時に黄色いハンカチ作戦も行い、参加者は222人にのぼりました。

現在、この7ブロックで自主防災組織を構築し、要援護者を支援できるよう取り組んでいます。

## 野口三四郎と 三四呂人形



▲写真①水を汲む半島の女（個人蔵）

七月十九日（土）より開催の企画展「郷土資料館収蔵美術品展」で展示予定の三四呂人形の作者、野口三四郎についてご紹介します。

野口三四郎は、戦前に活躍した人形作家です。明治三十四年（一九〇一）三島町大中島（現**兼本町**）で質屋を営む野口達之助の次男として生まれました。

昭和三年（一九二八）頃に三越の早撮り写真の機械技術師となり、翌年、朝鮮の京城（現ソウル）で朝鮮博覧会が開催された際に、自動写真撮影館の技師として派遣されたことが人形作家への転機となります。三四郎は博覧会終了後も



▲写真②水辺興談（個人蔵）

朝鮮に滞在して山村の風景や運動会、市場の様子など庶民の生活をスケッチしてまわり、これがその後の人形制作に生かされます（写真①）。帰国後、張子の製法を学び、東京で写真館を開業すると共に、本格的な人形制作を始めます。当時、人形を芸術の域に高めようという人形芸術運動が盛んな折、野口光彦や後に人間国宝となる鹿兒島寿蔵、堀柳女らと共に甲戌会を結成し、この運動にも力を注ぎます。

昭和九年（一九三四）に妻を、翌年には三歳の娘桃里を失うなかで人形制作に励み、昭和十一年（一九三六）「水辺興談（写真②）」を第一回人形芸術院展に出品し、最高賞である「人形芸術院賞」を受賞します。

この作品は、三島の広瀬（現泉町、芝本町）付近の源兵衛川で水遊びをしている甥の兄弟がモデルとされています。

三嶋大社所蔵の「春日団樂（写真③）」は、理想の親子日団樂（写真③）は、理想の親子像を表したものとわかれており、集大成の作品ともいわれています。

三四郎の作品は少年、少女、動物などが多く、三四郎自身も「私の作る子供の姿は乃ち私の失せた過去の姿の記録であるとも云える」という言葉を残しています。

三四郎は、三十五歳という若さで亡くなりますが、鹿兒島寿蔵が「天才的作家だった」といっていることから三四郎自身が早世でなければと惜しまれてなりません。

企画展は九月十五日（月・祝）まで開催され、三四呂人形の他に、楽寿園梅御殿の杉戸絵や玄峰老師の掛軸、栗原忠二の絵画などを展示します。



▲写真③春日団樂（三嶋大社所蔵）



ふるさとの人物ゆかりの地④

宇野朗

宇野朗博士は、明治・大正時代に活躍した三島出身の医師です。明治三年（一八七〇）大学東校（現東京大学医学部）に入学、卒業後も大学に残り研究や後進の育成にあたったほか、付属医院長や帝国大学評議員を歴任しました。

明治三十年大学を辞し、東京、浅草に楽山堂病院を開いた博士は三島病院（現三島総合病院）にも毎月出張診察に訪れました。博士の診察は大変な評判で、博士の治療を受けて助からないのであれば悔いはない、とまで言われたそうです。

教育に熱心であった博士は、上京した伊豆出身者を助ける伊豆郷友会の初代会長を務めるなど育英事業にも多大な貢献を行いました。昭和二年（一九二七）に七十九歳で亡くなった博士は、同じく医師であった父とともに本町の常林寺に眠っています。



▲博士が眠る常林寺（本町）